

旅してるのはへミンダウェイ？

前 栃木県立大田原女子高等学校 長嶋和彦

はじめに

数社の「国語総合」の教科書に採録されている角田光代「旅する本」はやさしい言葉で書かれ、何気ない表現に詩的な風情がたたえられた佳編であるが、その魅力は作品が読者に小出しに提供する謎によるところも大きい。古本屋の老人はどうしてその本について繰り返し「売っちゃっていいの？」と確認するのか？ その本はどうして主人公の行く先々に待ち構えているのか？ どうしてその本は読み返すたびに内容が変わっているのか？ 作品の中で答えが見出せるものもあるし、謎がそのまま置き去りにされているものもある。「旅する本」の面白さは織りなされる謎の面白さでもある。そして、主人公が十八歳の時に売り、旅をしていく本が、誰の書いた何という作品であるのかが明らかにされていないことも、「旅する本」をミステリアスに感じさせる一因となっている。誰の書いた何という作品なのか？ 作者は明らかにしようとしていないし、実在の本が想定されているのではないのかもしれない。それが明

らかにされなくても「旅する本」という小説は成立しているし、むしろよけいな情報なのかも知れない。しかし、モデルとなった本が実在しているのではないか、作者の中に「旅する本」として想定されているのではないかという憶測が謎解きの迷宮に読者を誘い込んでくる。

1 旅してるのはどんな本？

「旅する本」の叙述の中に主人公「私」が十八歳の時に売った本（以下「旅本」と呼ぶことにする）に関して書かれている箇所がある。拾い出すと次のようになる。

- ・ 大型書店にいけば手に入るような翻訳小説。
- ・ 読むたびに内容が変化しているように感じられる。

- ・ 主人公の友達の子だと思っていた女性は彼の恋人だった。
- ・ 彼らはホテルを泊まり歩いているとなぜか思い込んでいたが、実際は、アパートを借りて住んでいた。

- ・ おだやかな日常をつづった青春系の本だという印象を持っていたが、途中からいきなりミ

ステリの様相をおびはじめ、緊迫した場面がいくつも続く。

- ・ 若い作者のどこか投げやりな言葉で書かれた物語のように記憶していたが、単語のひとつひとつが慎重に選び抜かれ、文章にはぎりぎりまでそぎ落とされた簡素なうつくしさがあり、物語を読まずとも言葉を目で追うだけでしつとりと心地よい気分になれた。

以上から、旅本を特定するための条件を次のようにまとめてみた。

- ① 大型書店にいけば手に入るような翻訳小説。
 - ② 主人公は若い男性で、恋人がいる。
 - ③ 主人公たちはアパートに住んでいるが、ホテルを泊まり歩くような場面もある。
 - ④ 若者の日常をつづった内容が読み取れる。
 - ⑤ 簡潔な文体。
- この五つの条件を充たす小説があるとすれば、旅本として認定できる。

2 旅してるのは王子さま？

角田光代は読書についてのエッセーも多くもっている。あるいはその中に旅本について書

かれたものか、旅本を特定するためのヒントになる記述がないだろうかと探してみた。しかし管見した中には旅本を特定できるような記述を発見することはできなかった。ただ、『星の王子さま』について言及した文章において次のような記述を見つけた。

本好きだった小学校二年生の角田が入院していた時、おばがサン・ティグジュペリの『星の王子さま』を持ってきてくれるが、角田は『星の王子さま』を「はじめてつまらないと思う本」と決めつける。

…そうして高校二年生のとき、仲良しだった友達が、一冊の本をくれた。ちいさなサイズの、絵の入った本だった。私はそれを一気に読み、すごいと思った。別世界へ連れ出してくれるばかりでなく、じつにいろいろ考えさせてくれる本だった。なんてすごい本なんだろう、でもどこかで読んだ気がする。どこで読んだのか、なかなか思い出せなかったが、あるときふと思いついて、はっとした。それは小学校二年生の私が、病院のベッドでもおもしろくないと投げ出した、『星の王子さま』だったのである〔一〕。

作者の『星の王子さま』における、小学生のときには理解できずにおもしろくないと思ったものが、それから時間が経って、成長した高校生の中には「すごい」と思うようになったという読書体験は、「旅する本」において、主人

公「私」が成長することによって、作品の内容が違ってくるという体験と重なっている。

では旅本は『星の王子さま』なのだろうか？ どうもしっくりとは来ない。『星の王子さま』は大型書店に行けばたぶん手に入るだろう。王子さまを「若い男性」と言えなくもない。バラの花を恋人と強弁することはできるだろうか。けれど王子さまはアパートに住んでいないし、ホテルを泊まり歩かない。内容も若者の日常生活を描いたものとは言い難い。『星の王子さま』は旅本としてそぐわない。

角田光代は同様の体験を川端康成についても書いている。読み手である自分の変化によって作品が変化して感じられるという読書体験が「旅する本」を書く上での大きなモチーフになったことは間違いないであろう。しかし、旅本はまた別のもののように感じる。

3 旅しているのはヘミングウェイ？

さて、それでは旅本は誰の何という作品なのだろうか？ 古今東西、恋人のいる若い男が主人公の作品がどれだけあるのか。その中にはアパートに住んでいる男も山ほどいることだろう。探し出す糸口も見つからず、途方に暮れてしまった。作品を特定することは無理だし、もともと作者自身が特定の作品を想定してはいない可能性は高い。

そんなことを思いつつ授業に臨んでいたある時、アイルランドのパブで旅本を読んだ時に述

べられる主人公の感想「若い作家のどこか投げやりな言葉で書かれた物語のように記憶していたが、単語のひとつひとつが慎重に選び抜かれ、文章にはぎりぎりまでそぎ落とされた簡潔なうつくしさがあり、物語を読まずとも、言葉を目で追うだけでしつとりと心地よい気分になれた」という行りについて生徒に解説していて、「たぶんほとんど装飾のない、簡潔な表現をしていて、ちよつと読むとゴツゴツした印象を与えるような文章なんだろうね。ヘミングウェイなんかそんな文章だね。」と生徒たちに何気なく話して、はつと思いついた。そうだ、ここで語られているのはヘミングウェイの文体ではないのか。ヘミングウェイの、一文が短く、装飾が排除されて、ゴツゴツした印象を受け、ぶつさらぼうとも受け取れる文章。たとえば代表作『老人と海』のこんな一節。

老人の四肢はやせこけ、項には深い皺が刻みこまれていた。熱帯の海が反射する太陽の熱で、老人の頬には皮膚癌をおもわせる褐色のしみができ、それが顔の両側にずっと下のほうまで点々とひろがっている。両手にはところどころ深い傷痕が見える。網を操って大魚をとらえるときにできたものだ。が、いずれも新しい傷ではない。魚の棲まぬ砂漠の蝕壊地帯のように古く乾からびていた。この男に關するかぎり、なにもかも古かった。ただ眼だけがちがう。それは海とおなじ色をたたえ、

不屈な生気をみなぎらせていた。

福田恒存^{つねあり}訳『老人と海』（新潮文庫）

そこで、角田光代がヘミングウェイについて言及しているものがないかと探してみたところ、次のような発言を見つけることができた。

ヘミングウェイは形容詞をあまり使わないと聞いていたので、殺伐としていないかと思っていたのですが、読みやすく美しい。イメージがすっきり変わりました。命のきらめきみたいなものを書くのがすくなく、きらめきの一瞬に、この幸せはもう続かない気がするという怖くなるような変な緊張感があった。

読売新聞 二〇〇七年十月十六日

対談「翻訳文学のいま」

この発言の「殺伐としている」かと思っていたら「読みやすく美しい」とイメージが変わったという言及は、「旅する本」の「投げやりな言葉」が「簡素な美しさ」へ変貌して感じられるという感想と通じるものがあると考えられる。言い回しさえよく似ている。

「ハードボイルド」という名称はヘミングウェイの文体が起源になつていたはずだが、そこから派生してミステリの一ジャンルともなっている。旅本がミステリ的な要素を含んでいるという叙述は、このことからの連想かもしれない。旅しているのはヘミングウェイではあるまいか？

4 旅しているのは『日はまた昇る』？

ところで、主人公「私」はこの旅本を買った

めに「放課後のケーキを我慢してこの本を買った」と述べている。とすれば、旅本は、ケーキの代金を節約すれば何とか購入できるほどの、それほど高価ではなかった本であることが想像される。（もちろん、何度も何度もケーキを我慢したのかも知れず、あるいは自分の所持金にケーキの代金をプラスして購入した高価な本だったという可能性は残るが）そして、女子高校生が手近に手に入れることができたということには、旅本が文庫本であった可能性が高いように考えられる。主人公「私」の高校時代を作者・角田光代とほぼ同世代で、昭和の終わり頃と考えるならば、ヘミングウェイの本はむしろハードカバーで手に入れる方が難しかった。旅本は文庫本で出版されていたヘミングウェイの作品と想定できる。

では、角田光代が高校生だった昭和六十（一九八五）年前後、ヘミングウェイの作品はどのようなものが文庫本として書店に並んでいたのだろうか。調べてみると各出版社から次のような作品が発行されていたことがわかった。

・『武器よさらば』（岩波、旺文社、角川、講談社、新潮）

・『老人と海』（岩波、新潮）

・『日はまた昇る』（岩波、角川、講談社、集英社、新潮）

・『誰がために鐘は鳴る』（新潮）

・『海流の中の島々』（新潮）

・『エデンの園』（集英社）
旅本は、この中にある。

この他に各社から短編集が何点か発行されているが、「私」は旅本について一つのストーリーについてしか言及していないように思われるので、短編集は旅本の候補として除外する。

『老人と海』『海流の中の島々』は老人が主人公であるので、旅本の候補から外したい。

『武器よさらば』にはヘンリーとキャサリン、『誰がために鐘は鳴る』にはロバートとマリアという若いカップルが登場する。しかし、前者は第一次世界大戦、後者はスペイン内乱が作品の背景となっており、若者の日常というよりは、むしろ極限状態における恋愛とでもいうべき内容である。

『エデンの園』はデイヴィッドとキャスリンという若い夫婦の物語である。二人について「夫婦と名乗らずにいると、いつも兄妹に見間違えられた。」（第一部第一章）とあり、旅本の「友達の妹」という内容をかすめているようにも感じる。そして二人は新婚旅行中なのだが、「アヴィニヨンの上等のホテル」、ニームの「アンペトラール・ホテル」と泊まり歩いている。『エデンの園』には旅本である可能性が感じられる。しかし、アパートに住んでいるという叙述は現れない。

残されたのは『日はまた昇る』である。

『日はまた昇る』は第一次世界大戦に参加し、

傷ついで性的不能者となつてしまつたジェイクを主人公とした青春群像が描かれている。パリでの仲間たちとの日常と、スペインのパンプローナに闘牛（牛追い祭り）を見に行くことが主な題材とされ、「おだやかな」というよりはむしろ「利那的」「享乐的」であるが、そこには「若者の日常」が綴られている。

ジェイクにはブレットという恋人がおり、ブレットには兄がいることになっている。（第四章）ただし、この兄は作品中に登場せず、ジェイクと友人関係にあるかどうかはわからない。

さて、ジェイクと仲間たちはパンプローナへの旅行で、途中に釣りをするための宿屋に泊まり、パンプローナではホテル・モントーヤに泊まっている。ブレットはパリではホテル住まいをしているようであるし、その他にホテル・گران・セールなどという名前も登場し、「ホテルを泊まり歩いている」と記憶の中に残つても無理からぬところがある。そしてジェイクは、「ぼくのアパートは、この通りを渡つてサン・ミシエル通りをすこしさきへ行つたところにある」（第四章）、「タクシーが来たので、それに乗る、アパートの場所を運転手に告げた。」（第六章）とあるように⁽²⁾、アパートを借りて暮らしていることがわかる。

以上のことから、『日はまた昇る』は先に挙げた旅本の条件①～⑤をすべて満たしていることになる。

『日はまた昇る』の主人公ジェイクは性的不能者として描かれている。恋人のブレットは心でジェイクを愛しながらも、それだけでは満たされず別の男に身を委ねる。こうした設定の恋愛は、高校生では理解しがたいものがあるのでないだろうか。そして恋愛経験や性的経験をj経ることによつて作品に対する考えや評価も変化して行くことが考えられる。

旅本はヘミングウェイ『日はまた昇る』である。

5 そしてまた本の旅は続く？

筆者（＝長嶋）は旅本が『日はまた昇る』と特定しているが、実は旅本は『日はまた昇る』ではあり得ない。

「旅する本」は、二〇〇三年十月の書き下ろし新作朗読会「本読み日和」というイベントの中で朗読という形で発表したのが初出である。しかし、角田光代は先にも引用した二〇〇七年十月十六日の読売新聞紙上で、

ヘミングウェイも読んだことがなかったのですが、2年前にキューバに旅行したときに『海流の中の島々』をずっと読んでいました。と述べている。これに従えば、「旅する本」

執筆時に角田光代は『日はまた昇る』を読んでいることになる。旅本が『日はまた昇る』である可能性はない。

筆者は角田光代が消極的に嘘をついているのだと想像している。読売新聞紙上の対談の相手が金原瑞人というヘミングウェイの専門家であ

ることから、自分がヘミングウェイについて喋々するのを憚つたのではあるまいか。角田光代は「本がある、という理由で、学校で一番好きな場所も図書室だった⁽³⁾」というように、少女時代から大変な読書好きだった。ヘミングウェイの『老人と海』や『武器よさらば』は中学生・高校生向けの推薦図書として紹介されることが多い。読書について貪欲な学生時代を送つた少女が手に取る可能性は低くないと考えられる。実は角田光代は「旅する本」執筆以前に『日はまた昇る』を読んでいたのではないだろうか。ともあれそれは筆者にとつての我田引水的な想像に過ぎない。

おわりに

筆者は旅本が『日はまた昇る』だという結論に辿りついた。しかし、旅本が『日はまた昇る』ではないにしろ、筆者は旅本を認定する五つの条件を充たす作品を見出したことに満足している。「旅する本」の魅力は綾どられた多くの謎の中にある。読者がそれぞれに、自分の旅本を想定する中にも、「旅する本」の魅力は宿るだろう。

注(1) 角田光代「さがしもの」(新潮文庫 二〇〇八年) 所収「あとがきエッセイ 交際履歴」

注(2) 大久保康雄訳『日はまた昇る』(新潮文庫 一九五五年)。新潮文庫版は一九九八年から高見浩訳に替わっているが、高見訳では「アパート」の部分が「フラット」と訳されている。

注(3) (1) に同じ。